

Fact Sheet

横井玉子

——日本初の美術教育機関として女性の自立への道を開いた人物 ①

横井玉子は、嘉永7(1854)年、熊本支藩・肥後高瀬藩家老、砲術師範役の原尹胤^{はら まきたね}の次女として築地鉄砲州船松町で生まれた。原家は由緒ある家柄で、玉子には6人の兄・姉妹がいた。兄や姉、妹は皆、名家の婿や嫁になっている。ちなみに、次兄等照^{ともてる}の長男は戸川秋骨^{と かわけうこつ}(英文学者・作家)であり、姉武^{たけ}の長男は大野洒竹^{おお の しゃちく}(医者・俳人)である。このような家柄であったため、原家が明治元(1868)年に細川若狭守と共に熊本県高瀬(現・玉名市)に移るまで、玉子は江戸で武家の娘にふさわしい教養を身につけていたものと思われる。



ミトンをはめた横井玉子(明治20年頃)

熊本洋学校

熊本洋学校は、幕末の思想家横井小楠^{よこ いしやうなん}の教えを受け継いだ人たちにより明治4(1871)年に開校された。小楠は、横井家の次男として生を受けたが尊敬していた兄が早くに他界したため、家督を継ぎ、兄の遺児である左平太^{さへい た}と大平^{た へい}を養子に迎えた。彼等は小楠の自由で規律ある革新的教育を受け継ぎ、日本初の渡米者として活躍した。アメリカで二人は「男女共学の教育理念」「自由な規律ある教育」などキリスト教に基づく西洋式の教育を目の当たりにし、感銘を受けた。しかし、留学先での病により大平は一人先に明治2(1869)年に帰国する。その後、西洋式の教育を取り入れるため、野々口又三郎らと同校設立に貢献した。教育には外国教師が必要と考え、L・L・ジェーンズ氏を招いた。大平自身はジェーンズ氏に会わずして病で亡くなっている。

当時、男尊女卑の厳しい社会環境の中で玉子は、密かに横井みや子(小楠の娘)らと熊本洋学校に通い、英語やジェーンズ夫人から洋裁・西洋料理を学んだ。また宮内宇吉^{みやうち う きち}から日本裁縫^{いのうえちやう じろう}、井上長次郎から日本料理を習い、後に玉子が所属する矯風会刊行誌に「料理法」として連載され、大反響を呼んだ。その後玉子の死去した年に連載をまとめ書籍化し、『家庭料理法』として刊行されている。

(裏面につづく)

女性の実業教育のはじまり
「チャレンジした女性たち」

Fact Sheet

結婚生活

明治5(1872)年、玉子は横井家を相続するため留学先から帰国した横井左平太と結婚した。左平太は翌年留学先のアメリカに戻るが、玉子は横井家に残った。横井家には、姑のきよ(左平太の実母)、つせ(小楠の妻・矢島^{やじま}楫子^{かしこ}の姉)、小楠の息子時雄^{ときお}(後の同志社三代目総長)と娘みや子(後の海老名弾正の妻)がいた。夫の留学中、玉子はつせから裁縫・料理・茶道などあらゆる「婦芸」の手ほどきを受けた。

明治8(1875)年、左平太は肺患治療のため帰国した。玉子は看病のため急ぎ夫のいる東京へ駆けつけるが、まもなく夫は死去する。玉子の結婚生活は約4年、共に暮らした期間は数えられるほど大変短いものだった。

修学

東京に留まった玉子は、明治9(1876)年に上京した実家の原家に身を寄せた。そして同12(1879)年、桜田備前町芝教会に来日していた宣教師ワデルに洗礼を受けた。この洗礼は、玉子にとって熊本洋学校でのキリスト教の教えによる教育や、親戚になった矢島楫子の影響などから自然な成り行きだったと推測される。

また玉子は、明治14(1881)年小笠原家の高等女礼式を習得し、同17(1884)年吉島^{よしじま}滝音^{たきね}から琴の免許を修得、さらに同19(1886)年には東京府師範学校で高等裁縫・高等女礼式の教授資格試験に合格、同22(1889)年古流^{こうせいあん}、好静庵について茶道・華道を修得するなど積極的な姿勢で様々なことを学んだ。そして女性としての教養を身につけ、教師としての道を歩む準備をしていた。また、芸術にも目を向け、明治19(1886)年に油絵や水彩画を本多^{ほんだ}錦吉郎^{きんきちろう}と浅井忠^{あさいちゅう}に学んでいる。こうして美術の世界に足を踏み入れた玉子は、さらに明治32(1899)年白馬会に洋画研究のために入会し、そこで黒田清輝^{くろだせいき}などとの交流を深めた。こうした交流により、玉子は自分が歩むべき道を定めたといえよう。

(女子美術大学歴史資料室・吉田麻里)

(写真所蔵：女子美術大学歴史資料室)

女性の実業教育のはじまり
〜チャレンジした女性たち〜

Fact Sheet

横井玉子

——日本初の美術教育機関として女性の自立への道を開いた人物 ②

自立した精神

玉子は、明治18年(1885)年から芝区公立^{ともえ}靱小学校の助教として礼式や裁縫の教授をし、同時に築地明石町の海岸女学校教員でもあった。こうして、玉子は今までの経験から教師としての使命、職業女性としての自立に対する思いを社会活動の中から見出し、新しい女性像を教育に取り入れていくことを試みる。また、親戚である矢島^{やじま}楯子^{かじこ}の紹介で築地の新栄女学校において事務監督、礼式・裁縫の教員や舎監を玉子一人が受け持つといった器用な面をみせ、明治22年(1889)年新栄女学校と楯子のいた桜井女学校は合併し、女子学院という名称に変更された。玉子は多忙な楯子に代わり実質的な運営を担い、幹事兼舎監の仕事に加え礼式・裁縫・図画・割烹の4科目を教授した。

他方、楯子は、明治19年(1886)年から婦人活動を本格始動して東京基督教婦人矯風会を設立し、会長就任など女性のための活動をしていた。この会で玉子は、一夫一婦制の建議提出などに名が見られるように、女性の自立運動に積極的に参加をしていた。

この事柄から、玉子は自立した女性を育てる教育を志していたことが伺える。加えて、楯子は私立女子美術学校が創立した際に評議員として支援していたことも明らかになっている。

私立女子美術学校誕生

玉子がいつの時点で何故、女子のための美術学校を創ろうと決意したのかは未だに明らかではないが、明治33年(1900)年9月に私立女子美術学校設立のため女子学院を辞職している。この玉子の辞職により、女子学院は2、3名の代わりの教員を補充しなければならなくなった。これは、玉子の能力の高さを伝えるものである。

そして同年10月私立学校設立願を東京府知事に提出。設立願には、玉子のほか彫刻家の^{ふじた}藤田文蔵^{ぶんぞう}、^{たなか}田中晋^{しん}、^{やぐち}谷口鉄太郎^{てつたろう}が発起人として名を連ね、玉子が設立者となっている。私立女子美術学校は、10月には創立の認可が下り、明治34年(1901)年4月、本郷弓町に開校した。玉子の志は彼女の人生と新しい女性教育への思いから生れたものである。それは、「芸術による女性の自立」「女性の社会的地位の向上」「専門の技術家・美術教師の養成」という建学の精神であり、現在も変わらず玉子の目指した教育が引き継がれている。

こうした玉子の思いを表した私立女子美術学校であったが、当時の「良妻賢母」教育とは一線を画していたため、生徒数が伸びず、加えて発起人の田中・谷口の突然の辞職などから早くも学校存続の危機に立たされる。玉子は学校を初代校長の文蔵に託し、最大の問題である資金調達に奔走した。奮闘する玉子であったが、度重なる心労と数年前より患っていた病から、体調を崩していった。

この最悪な状況下で、玉子に手を差し伸べたのが^{さとう}佐藤志津^{しず}である。彼女の援助により、女子美術学校は何とか危機を脱した。しかし玉子の病状は重く、明治36年(1903)年1月4日午後7時10分に永眠した。

(女子美術大学歴史資料室・吉田麻里)

(裏面につづく)

独立行政法人 国立女性教育会館

女性の実業教育のはじまり
「チャレンジした女性たち」

Fact Sheet

佐藤志津／横井玉子 年譜

年代	年齢	佐藤志津	横井玉子	年齢
1851（嘉永4）年	0歳	常陸国行方群麻生（現：茨城県）山口舜海とサダの娘として生まれる。		
1853（嘉永6）年	2歳	父が佐藤泰然（医師）の養子となり、名を佐藤舜海または尚中とする。		
1854（嘉永7）年			肥後新田藩家老 原伊胤の次女として築地に生れる。	0歳
1859（安政6）年	8歳	水戸の大叔母の嫁ぎ先、藤枝富右衛門にあずけられ、礼儀作法を学ぶ。		
1864（元治1）年	13歳	佐倉藩（現：千葉県佐倉市）堀田正睦の息女のお相手となる。		
1867（慶応3）年	16歳	高和東之助と結婚（婿養子）。夫は名を佐藤進とする。		
1868（明治1）年			熊本県高瀬（現：玉名市）に移る。	14歳
1869（明治2）年	18歳	夫・進、ドイツへ医学留学。		
1872（明治5）年			横井小楠の甥、左平太（時治）と結婚。	18歳
1875（明治8）年			夫・左平太の看病のため、上京。左平太逝去。	21歳
1876（明治9）年	25歳	息子の昇誕生。		
1877（明治10）年	26歳	西南戦争時、軍医として夫・進は大阪へ。		
1879（明治12）年			芝教会にてワデル氏より洗礼をうける。	25歳
1881（明治14）年			小笠原家の高等女礼式を受ける。	27歳
1882（明治15）年	31歳	父・尚中逝去。		
1883（明治16）年	32歳	鹿鳴館開館、舞踏会にて活躍。		
1884（明治17）年			吉島瀧音に琴の免状を受ける。	30歳
1885（明治18）年			築地明石町、海岸女学校教員として礼式教授。芝区立鞆小学校助教として礼式、裁縫を教授。叔母・矢島楯子の勧めで築地新栄女学校に勤務。	31歳
1886（明治19）年			東京府師範学校にて高等裁縫、高等女礼式試験合格。本多錦吉郎や 浅井忠に西洋画・水彩画を習う。	32歳
1889（明治22）年			古流、好静庵について茶道、生花を学ぶ。女子学院（新栄女学校合併）にて教授する。	35歳
1896（明治29）年			『婦人新報』に「料理法」連載開始。	42歳
1899（明治32）年			白馬会に入会、洋画を研究する。	45歳
1900（明治33）年			女子美術学校新設申請。女子学院退職。	46歳
1901（明治34）年			4月私立女子美術学校開校。（本郷弓町校舎）	47歳
1902（明治35）年	51歳	私立女子美術学校校長就任。	病になり、佐藤志津に女子美術学校を託す。	48歳
1903（明治36）年			逝去。	49歳
1904（明治37）年	53歳	藤田文蔵校長、退職。校主と校長を兼任する。		
1908（明治41）年	57歳	本郷弓町校舎、火災。		
1909（明治42）年	58歳	本郷菊坂に新校舎完成、移転。		
1912（明治45）年	61歳	息子の昇逝去。		
1915（大正4）年	64歳	パナマ運河開通記念パナマ・パシフィック国際博覧会出品。女子美術学校創立25周年。中等教員無試験検定資格付与。付属高等女学校設立。		
1916（大正5）年	65歳	付属高等女学校、佐藤高等女学校と改称。女子教育功勞者・勲六等宝冠章を受ける。		
1917（大正6）年	66歳	財団法人私立女子美術学校設立。夫・進、初代理事長就任。		
1919（大正8）年	68歳	夫・進に女子美術学校を託し、逝去。		

独立行政法人 国立女性教育会館

女性の実業教育のはじまり
― チャレンジした女性たち ―